

雑誌名：科学技術社会論研究

論文タイトル：高校生のジェンダーステレオタイプと理系への進路希望

20世紀後半から、先進国における女性の大学進学率は著しく上昇し、現在では多くの国で男性よりも高い(Goldin et al. 2006, OECD 2015)。しかし、専攻分野をみると、数学、物理学、地球科学、工学、コンピューターサイエンス、経済学など、数学を多用する分野を専攻する女性は、男性よりも圧倒的に少ない(Ceci et al. 2014; OECD 2015; Kahn and Ginther 2018)。日本も例外ではなく、文部科学省『学校基本調査』の結果によると、1981年以降の大学(学部)に入学した女子における所属学部の割合は、理学、工学、農学は長らく5%以下で低迷している。

専攻分野選択に男女差がある背景には、本人の学力だけでなく、主観的な認識や、親、教員、学校、友人など、本人を取り巻く環境が関係していることが多数報告されており、ジェンダーステレオタイプもその要因の一つとして着目されているが、日本における報告は蓄積が少ない。そこで本研究では、日本の高校生のジェンダーステレオタイプと理系への進路希望がどのような関係にあるのかを調べた。

2012年に実施された2012年高校生と母親調査研究会が実施した「高校生と母親調査」のデータを用いて分析したところ、「男は外で働き、女は家庭を守るべきである」という固定的性別役割分業に関するジェンダーステレオタイプを肯定した女子生徒に比べて、肯定も否定もしなかった女子生徒および否定した女子生徒は、理系を希望する確率が高く、統計的に意味のある差が確認された。一方で、「男性の方が数学や専門的な技術を使う能力が高い」という能力に関するジェンダーステレオタイプは、男女ともに、理系への進路希望とは統計的に意味のある関係は確認されなかった。また、理系科目の成績、親の学歴や世帯年収といった家庭環境も、理系への進路希望と統計的に意味のある関係を持っていることが確認された。